

テーマ Paul Austerとメタファーとしての孤児

適用分野

アメリカ文学、ユダヤ系作家、ディアスポラ、移民、モダニズム、ポストモダニズム

研究名称

Paul Austerとメタファーとしての孤児

氏名所属

秋元孝文 教授
文学部 英語英米文学科

内容

●特徴

Paul Auster(1947-)の作品には孤児が頻出する。これをアメリカ文学研究の伝統である「アダムとしてのアメリカ」、すなわちR.W.B.LewisがAmerican Adamで定義したようにアメリカ文学の主人公は歴史や過去から解放された存在である、という「アメリカの孤児性」に結びつけることは容易であるが、20世紀の終わりに未だその孤児意識があると結論付けることは無理であろう。そこでその「孤児」の頻出を他の点に結びつけるのが本研究の趣旨である。

●研究内容

Austerの作品に登場する「孤児」を様々な概念から洗い直す。たとえばAuster自身のユダヤ系という民族性。ただ、これもまたユダヤ民族という別の故郷喪失の物語に還元するのではなく、むしろ現在いる場所（アメリカ）と自らの起源（ユダヤ的伝統）のどちらをもhomeと言い切れないディアスポラ的な状況を生きていると解釈することが出来よう。国民国家の解体が叫ばれる中、その姿勢は「世界」にしか属しないと自己を規定するコスモポリタニズムとも重なる部分がある。

またそのディアスポラ的要素は、ポストモダン作家といわれるAusterのなかに見られるmodernism的傾向、つまり前世代までの芸術との断絶を目指し自らを「孤児化」した指向とも重なり、PoMoかmoernismかという議論にもつながろう。それと同時にAusterの作品には、Poe, Hawthorne, Melvilleといった作家への言及やアメリカン・ロマンス的な傾向など、アメリカ文学の伝統を強く意識した特徴が多数見られる。ディアスポラ的に考えるならば、これは架空の故郷への郷愁ととらえることも可能であろう。

以上のように、Paul Austerの作品における「孤児」の存在を様々な角度から検討することによって、現在まで行われてきた「ポストモダン」「反探偵小説」「ポスト構造主義的」といったある意味画一的なAuster解釈に、より豊かな別の側面があることを明らかにしていくことが本研究の趣旨である。

キーワード ディアスポラ、移民、モダニズム、ポストモダニズム、コスモポリタニズム

連携方法

■ 講演 ■ 研修 ■ 研究相談 ■ 学術調査 ■ コメント ■ 共同研究